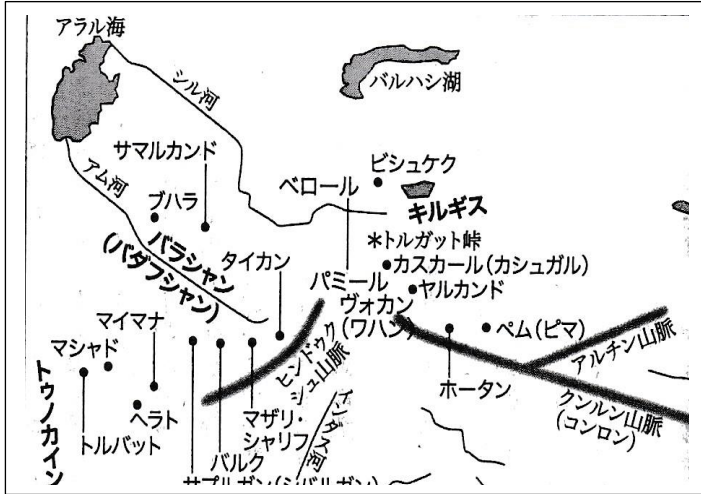


カシュガルから上都へ

八柳 修之

マルコら一行はパミール高原を越えて、タリム盆地の**カスカール**（新疆ウイグル自治区の西端）に入り、そこから天山山脈の砂漠地帯を通過してフビライ・ハーンのいる上都へ向かった。

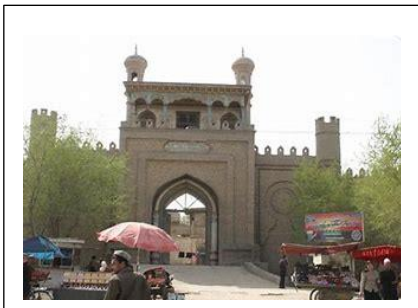


カスカール (カシュガル)

マルコは「カスカールは、いまでは大ハーンの従属下にある。住民はイスラム教を崇拝し、商業や手工業で生活をたてている。ここには素晴らしい花園や果

樹園、農場がある。国土は肥沃で、あらゆる生活必需品に恵まれている。綿も亜麻も大麻も非常に豊かにできる。この国からは多数の商人が世界の各地に出向いて商取引に従事する。面積は5日行程の広さである」と述べている。ここで一休みしてから、マルコたち一行はタリム盆地の南方の道を通り、ヤルカンドやホータン、ヒマなどのオアシスを辿って、さらに東方に進んだ。

ヤルカンドは大きなオアシスで、あらゆるものが豊かだったが、中でも綿が豊富だった。喉にこぶがある人が多かった。この辺りの道はいずれも砂漠を通る道だが、さいわい南方のクンロン（崑崙山脈）から川が流れ出し、大きなオアシスが点々ある。ホータンは東と北東との間にあり、8日行程の広さがある。ここは大ハーンに従属している。住民はみなイスラム教徒。ここはあらゆる物資が豊富であるが、特に綿は驚くほど大量に生産され大麻、亜麻、穀物も豊かでブドウ園、畑、花園も多い。住民は商売や手工業を営むが軍人には向かない。



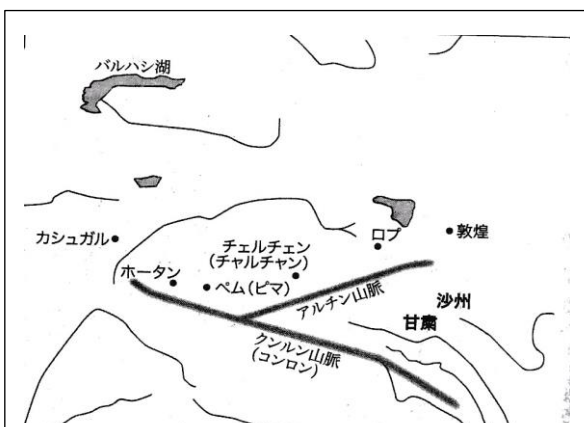
ヤルカンド



崑崙山脈



ホータン

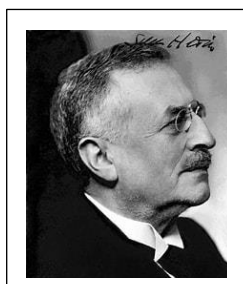


ホータン王国の幻影
絹と玉とホータン美人



次に5日行程の広さにある**ペム**に向かった。ペムにも多くの町や村があり、その中でも最も立派な都市がペムであり碧玉や玉髓を産する川がある。住民は商業と手工業で暮らしを立てている。奇妙な風習があり、夫が旅に出て、20日以上も留守にした場合、その妻は夫が出発するとすぐさま別の夫を持つ風習がある。

次の**チャルチェン**も大きなオアシスで大トルコ国の一地方だったが、タルタル人がすっかり荒らしてしまった。住民はイスラム教徒。ペムからここに至る間は砂漠。水質は悪く苦い。敵方の軍隊が国内を通過するようなとき、住民は彼らだけが知っている場所へ家畜ともども退避する。風で足跡が消え、どこへ行ったかは分からない。チャルチェンを出発すると5日間砂漠を横断し**ロブ**という町に着いた。**ロブ**は**ロブ砂漠**と言われる大砂漠のほずれに大きな湖の畔にある大きな町である。この大砂漠を横断するため、ここで一週間の休養をとり。人間と家畜の一か月分の食糧を携えて砂漠を横断する。とにかく最も狭いところでも一か月の行程である。この砂漠横断中は、常に丸一昼夜馬に乗って行かないと水にありつけない。水場は全部で約28か所ある。



(余談) ロブ・ノールはどこにあるのか。長い間謎となっていたが、1900年、スウェーデンの学者スヴェン・ヘディンは古代都市楼蘭の遺跡とロブノールの湖床を発見。古代には湖があったこと、タリム河が約1500年周期に移動する湖であるあったことを証明した。「さまよえる湖」は名著。

マルコたちは**ロブ砂漠**を馬で横断すると、**フビライ・ハーン**がじきじき統治している**沙州**に着いた。沙州は**敦煌**のある地方で、当時、ここを含めて、甘肅（カンスウ）地方は**タンゲート**地方と呼ばれていた。沙州の町の南には**莫高窟**という千仏洞がある。町には沢山の寺院や僧院、寺々にはあらゆる偶像が安置されていた。マルコは仏教徒の火葬の風習に驚いた。その後、敦煌から東へ向かい10日間、途中は全く人家もまれであるが周りは緑豊かなオアシスが多く騎行をへて**肅州**（スウシュウ）に至った。住民はキリスト教と偶像教徒からなり、大ハーンの支配下にある。大黃が大量に生育し商人たちはこれを仕入れ世界中に販売している。肅州の次は、タンゲート地方の都である**甘州**（カンブチュウ）に行く。甘州はタンゲート大州の首府であり立派な大都会、統治の中心である。住民は仏教徒が多いが、イスラム教徒、キリスト教徒もおり、三つの立派な教会を持っている。



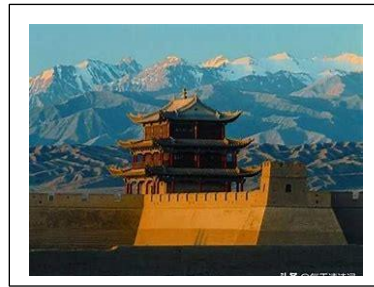
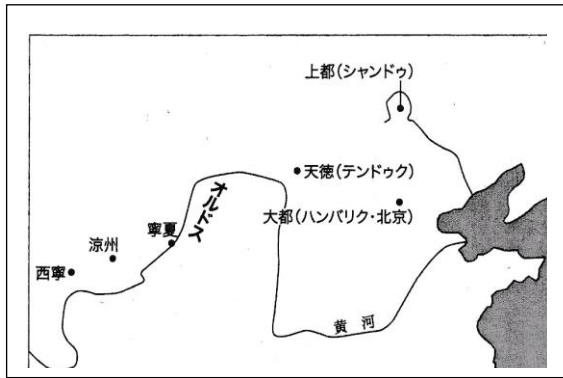
沙州 敦煌 莫高窟

肅州 酒泉

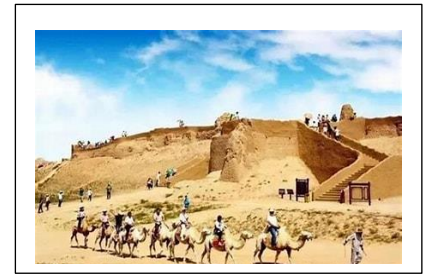
甘州

さて、マルコ達は、ある仕事のために、甘州に丸一年住んだ。おそらく何らかの商取引を行ったと見られる。（長沢和俊）その間に見聞きしたエチナ（甘州の北方騎行12日）、カラコルム（エチナの北40日ほど）について述べている。

一年後、マルコ一行は甘州を出発して、最後のコースに入った。5日後に**涼州**（エルギヌル）に着き、ここで南方にある西寧（シリンジウ）の話聞いた。西寧は世界でもとも質の良い麝香ジカが捕れ、膿胞を取り天日で乾かし、強い香りを放つ麝香であった。

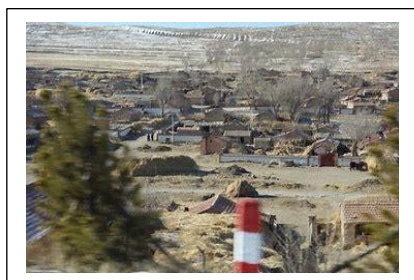


涼州 (エルギヌル)



寧夏 (エグリガイア)

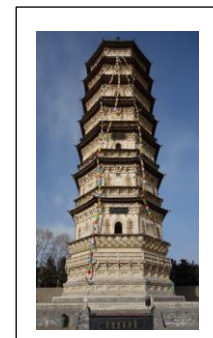
涼州から騎行8日で寧夏 (エグリガイア) に至った。ラクダの毛で織った駱駝毛布は世界最高、最良質の品だという。遼寧からは、オルドス地方を経て、テンドック (天徳、現在の帰化城付近) に着いた。ニコロとマッテオが帰って来たことを知ったフビライ・ハーンの従者が多くの兵士を引き連れ、遙々出迎えに来てくれた。この王はプレスター・ジョンの子孫 (実は未関係なのだが) で、キリスト教徒が多かった。この地方は群青の原料となる石を産する。ラクダの毛で織った良質の毛布が特産である。



チャガン・ノール



上都の遺跡



上都

テンドックから7日間、東に行くとカタイ。やがてシンダチュー (宣徳、今の宣化) に着いた。ここは工業が盛んで軍装品なら何でも製造していた。さらに東進すること3日、チャガン・ノール (白い湖) についた。ここには大ハーンの大宮殿があり、ハーンは好んでこの宮殿に住んだ。チャガン・ノールから北北東に3日行くと、フビライ・ハーンによって建てられた上都に着いた。マルコら一行は、3年半がかりでやっと、フビライ・ハーンの待つ上都の離宮に到着したのだった。後半部分の記述は少なくなっている。 (その3 完)